

原爆の記憶をめぐるメディア表象の政治社会学

矢野 撰士

(法学部政治学科4年)

- I はじめに
- II メディアで語られる広島と長崎のかたち
 - 1 社説に表れる被爆体験
 - 2 「ヒロシマ」の登場と「ナガサキ」の空洞化
 - 3 まとめ
- III 広島物語のわかりやすさと長崎物語のわかりにくさ
 - 1 「怒り」と「祈り」の物語性の違い
 - 2 「怒り」と「祈り」の物語の形成
 - 3 物語を固定化する「回想する都市」
 - 4 まとめ
- IV 再生産される「祈り」
 - 1 「祈り」と長崎
 - 2 まとめ
- V 結 論

I はじめに

8月。半世紀以上前の戦争に思いを馳せる季節が日本にはある。その中心には、8月6日と9日の2つの原爆忌がある。広島と長崎、2つの原爆被害は「怒りの広島」「祈りの長崎」という言葉によって日本社会において共有され、語り継がれるべき経験としてその記憶が継承されてきた。そしてその経験は、「反核兵器」というテーゼを確立し「唯一の被爆国・日本」の立場を形成し、世界に発信してきた¹⁾。無論のこと、この過程で広島と長崎の被爆者も同様に「反核兵

器」とうたってきた。しかし、多くのメディアや文献で目にするのは「広島」を通じた被爆ないし反核のストーリーである。

「新・長崎学」を提唱する高橋眞司は、広島に対し存在感の薄い長崎を「劣等被爆都市長崎」と呼称する²⁾。「広島の優位、長崎の劣位」という図式に対して「歴史的、思想的な意味は広島よりも長崎にある」とし、長崎が「忘却と無視と誤解のうちに放置されてきた」事態を強えられる被爆地だとして「劣等被爆都市長崎」と呼んだ。

この指摘にあるような被爆経験をめぐる広島の優位と長崎の劣位が存在するとすれば、それはどのような形式で、そしてどのような理由により生じているのであろうか。同じ被爆を経験した2つの出来事の一方が特権化され、他方が潜在化、あるいは忘却されることは、この被爆経験を単純化し、いくつかの重要な視点や経験を削ぎ落してしまうことにつながる。本論文では、広島と長崎の歴史経験の継承をめぐる問題を解明することを目的とする。

歴史経験は繰り返し語られ、社会的に共有される。社会学において、このように個人ではなく、集団によって共有された歴史経験は「集合的記憶」と呼ばれている。現代社会において、こうした集合的記憶はマス・メディアを通じて再生産され、共有される。したがって、本研究を進める上で、広島と長崎の被爆体験がマス・メディアによってどのように語り継がれているのかを分析することが重要である。これまで、被爆体験をめぐるメディア分析が行われてきたが、広島と長崎のメディア表象の比較の観点に立った研究は行われてこなかった。本論では、メディアの言説分析を通じてこの問題に取り組みたい。

本論文では、なぜ広島のほうが長崎よりも多く語られ、双方の被爆体験が「怒りの広島」、「祈りの長崎」という記憶として国民に共有されてきたのかを、集合的記憶を構築するメディア表象を分析することによって明らかにする。また広く共有されるニュースの物語を明示するために、新聞社説の言説分析も行う。Ⅱでは、朝日読売両紙の日本の被爆体験に関する社説を分析することにより、どのような物語で広島と長崎が語られてきたかを探る。Ⅲでは、Ⅱで明らかになった物語がなぜ共有されるに至ったのかについて広島と長崎の物語を比較することで明らかにする。Ⅳでは、長崎の「祈り」のイメージがどのようにメディアで表象され毎年の原爆忌報道で再生産されてきたかを示す。

Ⅱ メディアで語られる広島と長崎のかたち

本章では、広島と長崎の被爆体験がメディア上でどのように語られ、どのような違いがあったのかを考察する。広島と長崎の原爆被害が具体的にどのような違いを持って表象され、同時にどのような文脈の中で語られたかを新聞社説の分析によって明らかにし、また社説の比較をしていく中で社会に埋め込まれた広島と長崎の認識の枠組みを探る。その作業を通じて広島と長崎の被爆体験が各々の文脈から切り離され「ヒロシマ」という名の集合的記憶に収束していった過程をあぶり出す。

本論のテーマである広島と長崎の被爆体験は、太平洋戦争中の「被害者」である日本国民の姿として日本のメディア表象に組み込まれた。つまり被爆体験が国民全体に共有されるものとして意味づけられたのである。その体験がナショナルな体験として昇華される過程³⁾で「ヒロシマ」というキーワードでパッケージングされたことで、ローカルな長崎の体験が相対的に広島そのものの陰に隠れるかたちになった。その言説的特徴を新聞社説の分析によって探ることにしたい。

1 社説に表れる被爆体験

まずは、広島と長崎が原爆忌を迎える毎年8月6日または9日前後の全国紙である『朝日新聞』と『読売新聞』の社説を1946年から2012年まで比較分析する。ここでは社説内で「広島」「ヒロシマ」「長崎」「ナガサキ」というキーワード⁴⁾の登場回数と内容を比較分析し、どのように広島と長崎の被爆体験が社説内で論じられたかを探る。

戦後初めて原爆についての社説が登場するのは、1949年の『朝日新聞』である。被爆後4年間も原爆に関する社説が掲載されなかったのは連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）によるプレスコードという名の検閲が原因と考えられる。その社説は「広島に残る『生きた影』」と題され、爆発時の熱線によって蒸発的に消え去ってしまった男性の影が広島銀行（当時）の石段に残されていることを記している。また、社説の中では原爆の威力や被爆した人間がどうなったのかに触れるなど、原爆や核兵器の残虐性について論じている。このように、「生きた影」のエピソードを表題に据えたこの『朝日』の社説は、原爆の威力の凄まじさとその残虐性を強調することによって原爆の歴史経験を意味づけようとしていることがわ

かる。

だが、留意すべきはこの社説が同時に原子力の平和利用を強調するかたちで語られている点である。

「原子力が毒ガスなどちがう最も大切な点は、毒ガスが人間をいためつけることができぬ兵器であるのとくらべて、原子力はそれを爆弾として使用するよりも、はるかに膨大な平和的利用の領域をもっていることである。」

(1949年8月6日付『朝日新聞』)

このように、『朝日』における原爆経験をめぐる最初の社説は、一方において残虐性が強調されていながらも、他方において、それが原子力の平和利用の言説へと回収されていったことがわかる。

原爆経験はその後、毎年のように繰り返し社説で語られるようになる。その過程で原爆体験をめぐる語りのパターン化が生じてくる。それは「怒り」によって核兵器の廃絶を訴えるというものである。『朝日』は1949年以降65年間に64回も原爆忌にあわせて原爆に関する社説を紙面に登場させている。『読売新聞』では原爆に関する社説は1954年に初登場し、以後59年間で53回原爆忌にあわせ社説を掲載している。その初登場の社説では明確に核兵器の残虐性に触れることで被爆体験を共有し、「原爆記念日に答えるの道」として日本国民の取るべき立場を論じている。

「広島、長崎の如き過ちは最初にして最後のものたらしめよ。原水爆禁止の国民運動を世界的に展開せよ。これこそ真に原爆記念日に答えるの道である。」(1954年8月6日付『読売新聞』)

この記述からも明らかなように、第一に広島と長崎の原爆経験は、日本国民が共有すべきものであることが主張されている。そして第二に、それは原水爆禁止の国民運動として展開すべきものであるとされている。すなわち、この段階において、原爆経験は日本社会全体の集合的記憶となり、さらにそれは核兵器廃絶のシンボルとして意味づけられるようになったのである。

もう1つの特徴は、こうした原爆経験と核兵器廃絶のメッセージが「怒り」によって表象されている点である。1959年の『朝日新聞』では、こうした意味づけ

を行う「原爆許すまじ」というフレーズが登場する。

「今日、広島では原爆死没者の慰霊式と『原爆許すまじ』の平和記念式が行われる。…（中略）…記念日を迎えるに当って、国民揃って『原爆許すまじ』の決意を新たにしたい。」（1959年8月6日付『朝日新聞』）

この言葉はビキニ環礁での水爆実験によって被曝した第五福竜丸事件を受け、1954年7月28日に発表された歌曲『原爆許すまじ』からの引用であると考えられる。つまり、第五福竜丸事件を通じて生み出された「原爆許すまじ」という表現が、過去の被爆経験に対しても適用されていることがわかる。以後『朝日』には1963年、1964年に各6回ずつ、3年間で合計14回「原爆許すまじ」というフレーズが登場する。『読売』では、1967年から1968年、1971年、1972年、1976年の5年間の社説に合計8回登場し、「原爆許すまじ」という「怒り」の側面が強調されるようになる。

以上のように、広島と長崎の原爆経験は、「怒り」を通じた核兵器廃絶の主張として語り継がれ、それを通じて日本社会において集合的記憶として共有・継承されるようになったことがわかる。

2 「ヒロシマ」の登場と「ナガサキ」の空洞化

だが、注目すべきはその過程において原爆経験が次第に「ヒロシマ」というカタカナ表記によって表現されるようになってくる点である。

社説に初めて「ヒロシマ」が登場したのは1951年の『朝日新聞』である。「ノーモア・ヒロシマズ」という表現で紙面上に現れた。これは【No more Hiroshima's】という英語の表現をそのままカタカナ表記にしたものである。この言葉の初出は、48年3月5日の駐留米軍紙『バシフィック・スターズ・アンド・ストライプス』の記事に「No more Hiroshima's」という表現で登場する⁵⁾。Hiroshimaの所有格の後ろには「experience」または「tragedy」などの経験や悲劇を表す表現が続くと考えられ、そしてこの言葉が元となって現在も〈ノーモア・ヒロシマ／ノーモア・ナガサキ〉という、広島と長崎の被爆体験をもとに「核なき世界」を志向する理念を表す言葉として社会的に使われているのは周知のとおりである。

『読売』では1967年に「ヒロシマ」という表現が14回登場する。

「ヒロシマは一つである。世界庶民の平和祈願のシンボルとしてこそ、世界の広島といえるのである。… (中略) …ノーモア・ヒロシマの祈願の日だけにとどめることなく、なぜヒロシマの悲劇を招いたか、二度とこのような惨事をくりかえさぬためにはどうすべきかを、国民すべてが反省する日としたい。」(1967年8月6日付『読売新聞』)

ここで注目したいのは、「国民すべて」が「反省する」対象は「ヒロシマの悲劇」であるということである。つまり、ヒロシマというカタカナ語で日本の原爆体験がまとめられているのである。また同じ社説で「ヒロシマ」は以下のように世界化するとされる。

「世界で最初の原爆災害を受けたヒロシマ『ノー・モア・ヒロシマ』というヒューマニズム」の精神が彼らの心に強くヒロシマを印象づけたのであろう。… (中略) …こうして、ヒロシマは世界のヒロシマとなり、同時に世界の平和のシンボルとなったのである。」(1967年8月6日付『読売新聞』)

日本の原爆体験は「ヒロシマ」として世界に共有され、「世界のヒロシマ」は「世界の平和のシンボル」として生き続けるのである。以降の『読売』社説ではほぼ毎年「ヒロシマ」という言葉で日本の原爆体験をまとめている。その主張の多くは直接的な反戦反核ではなく、「忘れられない八月六日」というタイトルに象徴されるように原爆体験そのものの悲惨さと、悲惨な被爆体験を潜り抜けた被爆者の「生きててよかった」というコメントを紹介するなどヒューマニズムにのっとった社説が散見される。その中でも長崎やナガサキの原爆体験は語られることはほとんどない。この時点で、新聞紙面上で社会的に原爆を語る語り口からナガサキが削ぎ落とされはじめたと考えられる。

登場回数を検証しても、「ヒロシマ」が強調され「ナガサキ」がその影に隠れていることがわかる。『朝日』ではヒロシマが84回、ナガサキが16回、『読売』でもヒロシマが70回、ナガサキが29回と圧倒的にヒロシマの登場回数がナガサキを上回っており、その内容も「ヒロシマ」が日本の被爆体験そのものとして語られている。

「広島、長崎の被爆体験は、核廃絶の決意をともなったヒロシマという国際

語になっている」(1984年8月6日付『朝日新聞』)

「一度は外国の人たちに足を運んでもらいたいと思う場所がある。(中略) 私たちにとってそういう場所とは、(中略) やはりヒロシマだと改めて思う」(1987年8月6日付『朝日新聞』)

「被爆建築物の保存と研究は『ヒロシマの心の世界化』を目指す被爆国の責務」(1989年8月5日付『朝日新聞』)

「『ノーモア・ヒロシマ』をいい続ける責任国民一人ひとりのものでもある」(1990年8月5日付『朝日新聞』)

また各社説のタイトルを見ても『朝日』では「ヒロシマと反核運動の末路(1982)」、「核対決の中でのヒロシマ(1984)」、「ヒロシマから各時代の四〇年(1985)」、「ヒロシマと核の現状(1986)」、「ヒロシマの世界化のために(1987)」、「ヒロシマというとき(1991)」、「ヒロシマを世界化するために(1993)」、「ヒロシマは見えているか(1996)」というように原爆忌を扱った社説の多くがタイトルに「ヒロシマ」、「読売」では「ノーモア・ヒロシマ二十五年(1970)」、「ヒロシマを風化させるな(1971)」、「ヒロシマを繰り返さぬ心を(1985)」、「ヒロシマ 原爆の罪と核抑止力のジレンマ(2007)」などという表現を利用している。社説中にナガサキが登場することは少なく、タイトルに関しては一度も登場していないことがわかる。

この「ヒロシマ」という言葉は先に論じた日本国民が共有する「怒り」、そして核兵器廃絶の主張をまとめあげるシンボルとして語り継がれてきた。また、対外的にも日本の原爆経験はこの「ヒロシマ」という言葉によって共有されるようになった。1998年の社説内では、海外の要人が以下のように日本の原爆被害を語っていることを紹介している。これは、海外的にも日本の原爆被害が「ヒロシマ」という言葉で共有されていることを示す例であると同時に、国内的にも「ヒロシマ」という言葉で原爆被害の共有がなされているという暗黙の了解を示すと見えよう。

「ネール首相は五七年十月、広島で演説している。『原水爆禁止の訴えは人類

共通の願いです。私はあなた方の願いに心から共鳴し、この目的を達成するためにともに闘うことを誓います。私はインド国民にヒロシマに学べと伝えます』

九五五年十二月、当時のナラヤナン副大統領は『ヒロシマの悲劇的な経験は人間性への強烈な警告である。核兵器の使用をこれ以上許してはならない』とのメッセージを平和記念資料館に残している。』(1998年8月6日付『朝日新聞』)

以上のように、新聞社説は「ヒロシマ」という言葉で日本の被爆体験を語ることによって国民的なコンセンサスを得ようとしている。その一方で、長崎市の被爆体験、ひいてはビキニ環礁での第五福竜丸から国内の反核の叫びまでも「ヒロシマ」という言葉でパッケージ化されることで、広島と長崎の記憶がメディア・テキスト上で優勢化することにつながった。その過程で長崎の被爆体験が次第に削ぎ落とされてしまっていることに注目しなければならない。

3 まとめ

本章では、新聞社説における日本の原爆被害の言説表象から広島と長崎の違いを考察した。意図的ではないにせよ、原爆被害という記憶の国内的共有と海外的了解を得るために広島と長崎のローカルな被害の視点を単純化し、ヒロシマという言葉で原爆被害を象徴することで、日本人の戦争被害と反核のアイデンティティの源泉としての「ヒロシマ」を生んだ。その文脈の中で、被爆体験の記憶を想起する上で広島と長崎の経験が優勢的な意味づけとなり、同じ被爆地である長崎の記憶は切り離され、包摂され、時間とともに空洞化したと言える。

Ⅲ 広島と長崎の物語のわかりやすさと長崎の物語のわかりにくさ

1 「怒り」と「祈り」の物語性の違い

それではいかなる理由により、「広島」の記憶の優勢化が生じ、「長崎」の記憶の潜在化が生じたのであろうか。ここでは広島と長崎の原爆体験をめぐる「物語」の違いに注目しつつ分析を進める。

広島・長崎の被爆体験から生まれる物語は、時に「怒りの広島」「祈りの長崎」と言われる。それは新聞に限らず、さまざまなメディアを通じて繰り返し表象さ

れてきた。広島「怒り」は中沢啓治⁶⁾の『はだしのゲン』や峠三吉の『原爆詩集』で顕著に語られる。長崎のキリスト教的な「祈り」は被爆医師・永井隆⁷⁾が1949年に著した『長崎の鐘』⁸⁾がベストセラーとなり、同作品をモチーフにした同名の歌謡曲がヒットしたことで多くの国民に認知された。

原爆体験を「怒り」によって語るか、「祈り」によって語るか、という物語の違いが広島と長崎の集合的記憶の違いを生んできたのだとすると、そうした物語の違いが広島の優位性（そして「ヒロシマ」への象徴化）を生み出したのではないかという問いかけへと結びつく。つまり、「怒り」によって表象される原爆体験は、核兵器の廃絶を訴える日本社会全体に受け入れられやすい物語となるのではないか。他方で、「祈り」によって表象される原爆体験は、社会に広く受け入れられにくい「わかりにくさ」をはらむことになるのではないか。そしてこうした「わかりにくい」物語が「わかりにくい」まま再生産されていったことが、集合的記憶の想起から長崎の歴史体験がそぎ落とされることにつながったのではないだろうか。

本章では、「怒り」、「祈り」と二分される両市の被爆体験の物語がどのように固定化・再生産されてきたかを、歴史文化地理的状況や現在両市で被爆体験の語り部として存在する記念碑の違いを比較することによって明らかにする。

2 「怒り」と「祈り」の物語の形成

本節では、怒りと祈りの物語が形成されるに至った広島・長崎両市の歴史と地理的状況に注目する。

(1) 軍港としての広島、長崎

広島市は、1894年に勃発した日清戦争の戦争指揮のために大日本帝国軍の最高統帥機関である大本営がおかれた。1904年に開戦した日露戦争など相次ぐ戦争により、軍関係の諸施設が次々と設置され、広島は軍事拠点としての性格を強めた。街全体が軍事にかかわる産業都市として発達したのである。

長崎市は、日本の軍国主義政策のもと、重工業の重要性が大きくなり長崎は三菱重工のおひざ元として軍港としての発展が進んだ。特に市南部の長崎港では戦艦武蔵を建造した長崎造船所が存在した。とりわけ魚雷の生産に関しては当時の旧日本の海軍の魚雷約8割が長崎で生産されたと言われている。

(2) 長崎の物語の想起の阻害要因

広島と長崎の原爆被害や爆心地周辺の歴史的背景を比較すると、太平洋戦争を遂行していく中で重要な軍港であったという共通点がある。こうしたいわば「悲劇」の舞台としての共通点がある一方で、以下のような点で長崎では被爆体験の物語化を阻害する要因が見られる。すなわち、(a) 爆心地周辺の地理的状況 (b) 長崎市内の信仰の違い (c) 被部落差別地域の存在である。

(a) 爆心地周辺の地理的状況

まず広島・長崎両市の爆心地周辺の地理的状況を俯瞰する。広島市は太田川によって形成された沖積平野で、そのほぼ中心に位置する相生橋⁹⁾を爆撃目標とした。おおよそ目標どおり¹⁰⁾の爆撃が行われ、市内の破壊率は、爆心地から3キロメートル以内でも建物の9割以上が焼失・破壊し、4～5キロメートルの範囲内においても、3分の2におよぶ建物が劇甚な被害を受けた¹¹⁾。

長崎では、当初の目標である常盤橋から大幅にそれた爆撃¹²⁾が行われた。爆心地となった松山町から四方を見渡すと、南に開けた長崎湾がある以外は東西北を山に囲まれている。大浦天主堂や眼鏡橋などで有名な長崎市街は金比羅山の尾根にその視界を遮られる。もちろん原爆による爆風熱線の被害は、大浦天主堂のステンドグラスが砕け散るなどゼロではなかったが、同心円状に被害を比較すると、長崎型原爆のほうが威力は強かった¹³⁾にもかかわらず、開けた三角州地帯である広島市のほうが被害が大きかった。1949年6月23日付の『長崎民友新聞』社説では、「復興の意欲が希薄なのは、市中はほとんど大した被害もなく郊外の浦上だけが被害を受けたからともいえる。」と論じられ、長崎市民の間でも地理的な要因から他者意識があったと考えられる。

(b) 長崎市内の信仰の違い

また宗教的にも長崎の被爆体験の物語化を阻害する要因が見られる。長崎市は古くからポルトガル貿易港として栄え国内でも早い段階でキリスト教が布教された¹⁴⁾。

爆心地となった浦上地区はキリシタンが多く住む地区であった。中でも落下中心地となる浦上山里村は、「隠れキリシタン」の村として、近世・近代のキリシタン禁教政策のもとで、幾多の試練を潜り抜けてきた地域である。同時に浦上の南約1キロメートルには被差別部落民約1300人が居住しており、先述の軍事産業

にも多く労働者として従事していた。一方当初の爆心目標地点であった長崎市中心部は、浜町を中心とした商人の町で秋の大祭「おくんち」で有名な金比羅山の南の麓の諏訪神社を信仰のよりどころとした神道文化の中にあった。

長崎のアクターの中心であった彼らにとって、山を隔てて北に位置する浦上のキリスト教信仰の町は、異質な文化の町であった。このことから長崎旧市街の人々にとって原爆は長崎ではなく浦上に落ちただけという印象が生まれ得たということが容易に想像できる。

広島はその多くが浄土真宗の門徒である。彼らは「安芸門徒」と呼ばれ、鎌倉時代末期から南北朝期に成立し、現在まで浄土真宗の信仰の基盤が強い。さらに(a)で指摘したとおり、広島市の全域が破壊されているため、地域によって宗教による被爆体験の違いは生まれることはなかった。

(c) 被差別部落地域の存在

信仰文化以外にも、長崎と浦上を隔てる文化的差異が存在する。それは被差別部落地域の存在である¹⁵⁾。長崎の被差別部落民は、現在の寺町、大音寺と皓台寺間の幣振坂にあった「かわた町」に住んでいたとされる¹⁶⁾。1648年に「かわた町」の人々は西坂（長崎と浦上の境界線）へ強制移転を命じられ、その後隠れキリシタンの監視や検挙などの職務¹⁷⁾のため浦上へと移住させられた。

一部の市民は「市街に落ちなかったのは、お諏訪さん（諏訪神社）が守ってくれたおかげ」と言ってはばからなかった¹⁸⁾。そして「浦上に落ちたのは、お諏訪さんに参らなかつた“耶蘇”への天罰」との悪罵を浴びせたという。それは江戸時代に端緒を持つ長いキリシタン迫害の歴史の中で醸成された異教徒に対する信仰差別心が吐かせたものであったであろう。同時に、被差別部落地域であったことも市街の人々にとって浦上を遠ざける遠因になったと言える。この被差別地域を爆心として起きた惨劇を、旧市街地の人々が「俺のところには関係ない」といった他者意識で捉えていることが被爆地長崎としての連帯を分断している。

(3) まとめ

被爆地長崎でさえ、当事者性を持って共有されることのない「ナガサキ」。宗教差別と部落差別に両足が浸かった長崎のきのこ雲の下での出来事は、その差別を体感することのない外部の人々にとってどれほど理解しにくいものか、想像に難くない。そこに渦巻く難解さは長崎の「教会」というステレオタイプにのっと

り、「祈り」として外部から判定された。その言葉は、長崎の被爆体験をキリスト教徒の被爆体験として、つまり多くの日本人にとって「他者の記憶」として共有された。一方で広島原爆は無差別に広島の人々を襲った。そのため、どの地点でもおおそ共通の「怒り」として表出した。外部の人々にとっての物語理解の難易そのものが広島の「怒り」と長崎の「祈り」という物語のタイトルを決定した。

3 物語を固定化する「回想する都市」

本章では、「広島物語のわかりやすさ」と「長崎物語のわかりにくさ」がどのように固定化されてきたかを、広島・長崎の歴史的環境¹⁹⁾から探る。両市は1949年に制定された「広島平和記念都市建設法」と「長崎国際文化都市建設法」²⁰⁾によって復興した。その都市計画に基づいて市内各所に設けられた被爆体験の記憶を想起する舞台装置と、象徴的な被爆遺構を比較し、物語の固定化を招いた原因を明らかにしていく。

集合的記憶、そしてそれを表象する物語は新聞報道や文芸作品などだけではなく、さまざまなモニュメントによっても想起される。こうした歴史を語るモニュメントは物語と集合的記憶を回想する装置として存在し、その歴史的環境を抱える都市は集合的記憶の「場」となる。その「場」と市民たちとの間の関係がやがて際立ったイメージとして共有される²¹⁾。それでは、広島と長崎の物語を現地で回想するための装置はどうなっているだろうか。

毎年原爆忌は多くのメディアが被爆地を訪れ、原爆に関して報道する。その際に、映像や写真に含まれる現在の広島・長崎両市の平和公園周辺の景観は多くの視聴者に、「広島と長崎」のイメージを無意識的に付与する。その舞台装置が繰り返し報道されることによって、広島と長崎の「物語」が固定化されてきたと指摘することも可能だろう。

(1) 広島の集合的記憶を想起する舞台装置

広島モニュメントの特徴として、第一に、直接的な原爆の被害を想起する建物の存在、そして第二に、「怒り」を表象するモニュメントの存在を指摘することができる。

広島の被爆体験を表象する際には原爆ドームの肖像が頻出する。原爆ドームは爆風の凄まじさ、原爆の恐怖を視覚的に想起させるものである。



写真1 峠三吉詩碑

また、平和公園内に佇む代表的な被爆文学人として知られる峠三吉の詩碑には、広島の被爆者の怒りが込められている。

ちちをかえせ ははをかえせ
としよりをかえせ
こどもをかえせ

わたしをかえせ わたしにつながる
にんげんをかえせ

にんげんの にんげんのよのあるかぎり
くずれぬへいわを
へいわをかえせ

これは『原爆詩集』の「序」と呼ばれる詩だが、原爆と原爆を使用するに至った人類に対する怒りと論しとして見るものすべての心に刻まれる。多くの被爆者の心を代弁している代表的な詩碑だろう。

(2) 長崎の集合的記憶を想起する舞台装置

一方、長崎のモニュメントはこうした「わかりやすい」物語の想起を困難にするものである。

長崎の原爆体験は、被爆した浦上天主堂が戦後保存されず、新たに再建されたという出来事が示すように、長崎市内に直接的な被爆を受けた象徴的な建造物がほとんど存在していないということから、戦後、新たに設置されたモニュメントによってその記憶の想起を獲得しようとする動きが顕著に見られる。平和祈念像がその好例であろう。平和祈念像の制作者の北村西望は、この像を神の愛と仏の慈悲を象徴とし、天を指した右手は“原爆の脅威”を、水平に伸ばした左手は“平和”を、軽く閉じた臉は“原爆犠牲者の冥福を祈る”という想いを込めた。この記念像の土台部分にはその旨を記した北村西望の言葉が刻まれている。モニュメントによる記憶の想起の獲得が目指されたことがわかる。

しかしそれ以上に、長崎の〈物言わぬ証人〉の不在を象徴するエピソードがある。爆心地公園に立つ被爆50周年記念事業碑（母子像）の建築設置をめぐる問題である。爆心地公園には原爆落下中心地碑と原爆受難者名奉安箱が安置されており、多くの被爆者にとって無宗教の墓石としての役割を果たしてきた。しかし1996年3月、平和公園の再整備に伴いこの中心地碑を撤去し、新たに女神像を設置するという計画が決定された。1956年に長崎市によって設置されたこの石柱の撤去をめぐる、多くの被爆者は同年の平和祈念式典を欠席するなど明確に異を唱えた²⁹⁾。決定内容もさることながら、撤去から女神像の設置まで協議の蚊帳の外に置かれたからである。結果的に、石柱は撤去されず、女神像は「被爆50周年記念事業碑」として爆心地公園の片隅に佇んでいる。無宗教の墓石を撤去してまでキリスト教的「聖母」を象徴する女神像を設置しようという動きは、直接的な被爆体験の記憶を想起するというよりも、被爆体験をその想像において祈念に変換しているように思える。

広島原爆ドームのようにインパクトのある直接的な被爆遺構の存在は、その爆風や熱風といった物理的な被爆の記憶を想起することができる一方で、長崎のようにインパクトのある被爆遺構が存在していないと、モニュメントによって精神的な記憶を間接的に想起せざるを得ない。このことは、広島と長崎の歴史的環境の相違点を指摘する上で重要になってくる。

4 まとめ

本章では、広島と長崎の物語がどのような違いを持っているかを指摘した。「怒り」で語られ、同時に「わかりやすい物語」として共有される広島の被爆体験に対し、キリスト教のフィルターを1枚通して「祈り」として語られ、その歴史や

文化や被爆地の地理的状況の複雑性から「わかりにくい物語」として語られる長崎の被爆体験は、被爆の記憶を共有しようと試みる際に削ぎ落とされてしまう。この「わかりやすさ」と「わかりにくさ」は物語の基礎としてメディアで表象される。次章では、その物語がメディアでどのように語られ、集合的記憶として定着したのかを論じる。

IV 再生産される「祈り」

重要な点は、前章で明らかになった、広島と長崎の物語が反復され再生産される点である。それは毎年の広島と長崎の式典を報じ、集合的記憶の想起を促すマス・メディアの報道を通じて行われる。そしてそれを通じて広島と長崎のイメージが固定化し、さらには増幅することになる。それは次のことを意味する。すなわち、広島物語の「わかりやすさ」が再生産されるのと同時に、長崎の体験を日本国民に広く共有されることを阻害する「わかりにくい」物語もまた再生産されるのである。それが「広島」と「長崎」の差異を増幅することになる。そして日本社会で広く共有される原爆体験の集合的記憶において、「広島」の優先的な意味づけをますます際立たせ、「長崎」の潜在化、ないしは忘却を促進させていくのである。

こうした観点から本章では、広島「の「わかりやすさ」と長崎「の「わかりにくさ」がどのような形でメディア表象されたのかを探る。特に「長崎＝祈り」というイメージがどのようにして増幅されたのかを明らかにしたい。これは外的なステレオタイプとしての長崎のイメージ、すなわちキリスト教や教会など、江戸時代のポルトガル・オランダ文化との交流によって生まれた、一見わかりやすい文化に呼応していると考えられるだろう。しかし、広島と同様の被爆体験をしているにもかかわらず、その肝心の被爆体験そのものは削ぎ落とされ、どうして「祈り」という言葉だけが長崎の集合的な記憶として共有され続けているのだろうか。原爆忌の記事に掲載された写真を分析することによって明らかにする。

1 「祈り」と長崎

本節では、『朝日』と『読売』両紙の原爆忌当日の夕刊記事に掲載された写真を比較し、長崎がどのようにして「祈り」というイメージを強要されたのかを探る。写真を比較する理由は、両紙とも紙面の充実のために写真掲載を年々増加さ

せており、紙面上に掲載された写真が持つ視覚的効果は非常に高く、直感的イメージが訴求されるからである。同じような記事内容でも掲載された写真の与えるイメージによって記事が訴えかける内容が大きく異なることはままある。原爆忌を伝える新聞記事にどれほど、どのような内容の写真が掲載されていたのかを比較することで、朝日読売両紙が読者にどのような印象を与え、また読者の持つ印象に沿った写真を掲載していたか、すなわち社会的に共有された広島と長崎の原爆被害のイメージを明らかにできるだろう。

8月6日付の広島原爆忌を伝える写真では、原爆資料館の屋上から撮影したと思われる平和公園と原爆ドームを一望できる写真や、平和公園中心に設置されている原爆死没者慰霊碑に向かって手を合わせる人々の写真、また6日夜に原爆ドーム前を流れる元安川で行われる「とうろう流し」の様子を写した写真などに分類できる。このうち最も多く掲載されているのは平和公園に集まる群衆の写真で、『朝日』では初めて写真が掲載された1952年から2012年までの60年間で計36回掲載され、『読売』では初めて写真が掲載された1949年から2012年までの64年間で計47回掲載されている。これは広島原爆被害の象徴である原爆ドームや平和記念公園と、それに集まる群衆を映すことで、原爆に対する人々の関心の高さを示しているといえる。また、「原爆ドーム周辺で祈る人」や「とうろう流しをしている人々」の写真なども数多く掲載されている。広島では、その慰霊の方法は記念式典で行われているとおり、慰霊碑に向かって祈りを捧げ平和への誓いを願うなどするものである。

8月9日付の長崎原爆忌を伝えるものでも、広島と同様に平和公園で行われる平和祈念式典を撮影したものが多い。広島原爆ドームの代わりに、戦後北村西望によって造られた平和祈念像に向かって慰霊と反核の誓いを立てる平和祈念式典が撮影されている。しかし、長崎は広島と異なりもう1点別の写真が掲載されることが多い。浦上天主堂内で挙行される慰霊ミサの様子を写したもので、ベールをかけた女性たちが聖壇に向かって慰霊と世界平和を祈っているものだ。またキリスト教の幼稚園で祈る女兒の写真も掲載されており、全体的にキリスト教的な「祈り」の場面を多く掲載している。『朝日』では31回、『読売』では24回掲載され「長崎原爆被害＝キリスト教」という構図が「祈りの場面」という実像のイメージを経由して多くの読者に共有された。

また、1967年『朝日新聞』に掲載された特集記事「調査対象者はここで被爆した」という記事内で、広島原爆の爆心地を表す記号が原爆ドームであるのに対し、長

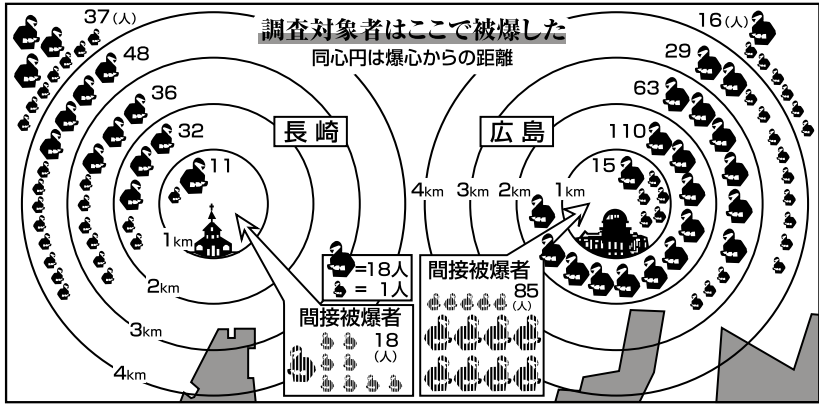


図 1

(1967年 8月 7日付『朝日新聞』より引用)



写真 2 大浦天主堂



写真 3 浦上天主堂

崎のそれは爆心地近くのモニュメント的の建造物である平和祈念像でも浦上天主堂でもなく、爆心地から遠く離れた「大浦天主堂らしきキリスト教教会」とあるという点も長崎がキリスト教の文脈で一般に認識されているということが指摘できよう。

大浦天主堂は国内最古のキリスト教建築で1933年に旧国宝、1953年に国宝にも指定されているということからも、多くの国民にとって親しみ深いものである。そのシルエットが明らかな間違いとして爆心地を表す記号として使用されているということは、同時に多くの国民の認識の中に「長崎＝キリスト教」というイ

メージが広く共有されており、『朝日新聞』がそのイメージに沿うように大浦天主堂のシルエットを「長崎の爆心地=キリスト教の町」を表象する代表的モニュメントとして使用したとして指摘できる。

2 まとめ

以上のような点から、長崎は平和への祈りをキリスト教的なものとして共有され、社会的に「祈り」を強要させられたと言える。「祈り」を連想させるイメージが長崎の被爆体験を象徴させるアイコンとして毎年原爆忌に繰り返し共有され、長崎の被爆体験の集合的記憶として再生産され続けていることで、「長崎=キリスト教=祈り」という一見単純なイメージが増幅され、きのご雲の下で起きた悲劇そのものや、あるいはその内部にある地理的相違や歴史的な差別に端緒を持つ深淵に横たわる問題が削ぎ落とされてしまった。

V 結論

本論文では、なぜ広島よりも長崎のほうが取り扱われることが少ないのか、またなぜ長崎は「祈」っているのかを、新聞の定性・定量分析、広島長崎両市の地理的状況や歴史的環境を比較し、それがどのようにメディアで報じられ、集合的記憶として昇華したのかを分析した。

新聞では被爆体験が語られる時には常に「ヒロシマ」が支配的に表出している。広島と長崎双方の被爆体験を「ヒロシマ」という言葉でまとめあげ被爆体験を日本社会全体の記憶へと意味づけなおすことで、世界に対する「唯一の被爆国」としての「反核」の主張に国民的コンセンサスを得ようという試みを感じられる。「怒り」という言葉が国民に共有され、広島の被爆体験から第五福竜丸事件に至るまでの核の脅威に対する「怒り」という国民感情が醸成された。

長崎の被爆体験は「祈り」として多くの国民に受け入れられている。それには、長崎の被爆体験の物語の持つわかりにくさに原因の一端がある。一般的に、わかりにくい物語よりもわかりやすい物語が汎く共有される。広島の被爆体験は、広島市街が破壊され、そして一般市民が犠牲となったというものであり、戦争の悲惨さとともに、戦争に対する、そして核兵器に対する「怒り」を想起させる物語である。この記憶と物語は日本社会全体で等しく理解可能な内容である。一方で、長崎ではキリスト教徒が多く被爆しており、被爆医師の永井隆が説いた、被爆は

全人類の罪に対する贖罪であり、浦上の信徒の死は燔祭<ホロコースト>だったとする宗教的諦観が多く共有されている。この時点で、単純な戦争中における「惨劇」の域は脱している。これに加え、江戸時代から続く宗教差別と部落差別が二重三重に積み重なった上で、さらに破壊されたのは街の中心ではなくその被差別地区だった浦上地区であったため、多くの人にとって理解に時間を要す「わかりにくい物語」となってしまった。

現地の歴史的環境がそのわかりにくさを全国的に共有することの一助となった。直感的に原爆の威力と破壊を認識できる被爆遺構である原爆ドームが広島シンボルとして存在する一方、長崎シンボルは被爆後北村西望によって作られた平和祈念像である。銅像を見て間接的に被爆の威力と破壊に思いを馳せることは難しい。そして「怒り」を示すモニュメントが広島には存在し、一方で長崎にはキリスト教をモチーフにしたモニュメントが多い。ここでも被爆体験はキリスト教というフィルターを通して表象される。

そのような集合的記憶が、原爆忌の写真が毎年再生産されることで長崎の「祈り」という記憶が固定化され、それ以外の記憶は削ぎ落とされてしまう。広島は平和記念公園に集まる不特定多数の「日本人」を写しているのに対し、長崎は浦上天主堂で祈るキリスト教徒の写真が多く掲載された。それは、ただでさえも死傷者数が少ない長崎の被爆体験をキリスト教徒の記憶であることを印象づけることができよう。それは多くの日本人にとって「他者の記憶」であることをより一層定着させる。「ヒロシマ」というマクロな視点では日本国籍の被爆体験であるのに対し、長崎というミクロな視点に立つと途端に「キリスト教徒の記憶」という遠い記憶として共有される。

以上の点から、日本の被爆体験として広島が多く語られ、長崎の記憶が「祈り」として表象される理由は、歴史的、宗教的、文化的、地理的、そして政治的状況を広島、長崎両市で比較した際に広島物語のほうが「わかりやすい」こと、また「わかりにくい」長崎物語を単純に伝える際に生まれた「キリスト教的祈り」のイメージが、毎年再生産され続けているからであると結論づけたい。削ぎ落とされた記憶は、長崎に当事者意識を持たない限り現れることはない。多くの国民が持つ「祈る長崎」への他者意識は先に挙げた諸要因の結果の一つであるが、この他者意識こそ、予防できるはずの悲劇を生み出しているのである。広島と同じようにきこ雲の下で起こったことの深淵に横たわる根深い差別や地域格差を知ること、単純に「祈り」で語られるほど長崎の被爆者が画一的でないことが簡

単にわかる。特定のイメージでフラットにされた時に見落とされる多くの要素もまた、被爆によって失われた命である。

- 1) 川野徳幸 (2010)。
- 2) 高橋眞司 (2004)。
- 3) 2001年9月11日に発生したアメリカ同時多発テロでは、ハイジャックされた旅客機がワールドトレードセンターに激突する映像とともに、犠牲者やニューヨークの消防士を中心に WTC の中あるいは下にいた人間に焦点が当てられた物語がメディアの中で語られてきた。これによって9.11はアメリカ国の問題ではなく、「グランウンド・ゼロ」から世界を蛙瞰した物語が全世界に配信され、共有された。このようなローカルな経験を鳥瞰的、すなわちなショナルな視点で語ることによって経験の国籍化が図られることになる。同時多発テロは多くの日本人にとって、「イスラム原理主義テロ集団アル・カーイダ」による同盟国アメリカへの破壊活動として共有された。それは同時に、日本の同盟国という立場に立脚した視点でもあっただろう。9.11はアメリカのローカルな視点が、「自由に対する脅威」としてナショナルな視点に昇華された。
- 4) 広島とヒロシマ、また長崎とナガサキでは全く使われる意味合いが異なる。「広島」を含む社説は166件、「長崎」を含む社説は106件と、カタカナ表記のそれに比べ登場回数が飛躍的に伸びるが、これは状況説明や解説的にただ単純に地名として登場することが多いからである。一方カタカナ表記の「ヒロシマ」「ナガサキ」は登場回数が少ない。カタカナ表記には必ず原爆体験と核廃絶の文脈が伴うため、地名呼称として用いられる漢字表記よりも使われる回数は限られるのである。従って、漢字表記とカタカナ表記を混同するべきではない。
- 5) 『中国新聞』1972年1月19日付の第15面によると、それまで英国『デイリーエクスプレス』記者のウィルフレッド・バーチェット氏だと思われていた「ノーモアヒロシマズ」の生みの親がUP特派員だったルサフォード・ポーツ氏が書いたものだと判明したとしている。
- 6) 中沢は、被爆後に亡くなった母の火葬の際に遺骨が残らなかったことをきっかけに、すべてを奪っていった原爆に対し悲しみと怒りを覚え、「恨みを晴らす」ために原爆をテーマとする作品を数多く残した。『はだしのゲン』はそのうち最も幅広く受け入れられている作品で、累計発行部数は1000万部を超える。
- 7) 永井は、被爆は全人類の罪に対する贖罪であり、浦上の信徒の死は燔祭くホロコースト>だったとする宗教的諦観に基づき、被爆体験を受容し世界平和をキリスト教的な「祈り」によって獲得しようと説いた。
- 8) この小説は、原爆の悲惨さを克明に記しているながらも著者本人のキリスト教信仰が色濃く反映された作品である。
- 9) 相生橋は、その橋桁がT字型で上空から非常に目立ち、また広島市の中心であり、かつて広島大本営がおかれた広島城も近かったこと、また海運の要である宇

品港も近かったことから目標として設定された。

- 10) 正確な爆心地は現在の大手町で、島病院の上空約580メートルであったとされる。原爆ドームはこの爆心地から西に200メートルの地点にある。当初の投下目標であった相生橋から400メートルほど東にそれたが、目標とされた都市破壊はほぼ完遂した。
- 11) 広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会（1979）。
- 12) 当初投下目標とされていた中島川にかかる常盤橋から賑橋付近は周辺に店舗や民家が密集しており、目標中心点から2キロメートル地点にかつて戦艦武蔵を建造した長崎造船所があったことから、原爆による破壊目標の中心に据えられた。しかし、長崎爆撃時に曇天だったこともあり、当初の爆撃目標から標高360メートルの金比羅山を隔て、遠く4キロメートル離れた浦上の松山町が爆心地となった。
- 13) 広島原爆はTNT爆弾18キロトン、長崎原爆は21キロトンほどの破壊力を持っていた。当初は福岡県小倉市（現北九州市小倉北区）の小倉陸軍造兵廠の風船爆弾工場を投下目標としており、広島よりも広大な破壊を目的としていたためと考えられる。しかし、前日の八幡空襲による残煙の影響で投下目標が目視できなかったため、第二目標であった長崎に投下を決定した。
- 14) 1570年に大村純忠が宣教師との間に長崎をポルトガル貿易港とする協定を結び、それによる人口増大を考慮して都市づくりを始めた。そのため、長崎には多くのキリシタンが誕生した。しかし1587年に豊臣秀吉による禁教令が発令されると、北部一帯の浦上地区では1597年の二十六聖人の処刑に代表されるように、多くのキリシタンは迫害を受けその多くは殉教することになる。
- 15) 高橋真司（2005）。
- 16) 1630年に描かれた『寛永長崎港図』でかわた町の位置が確認できる。
- 17) 彼らは、発見されたキリシタンの牢屋番や死刑になる者を縛り連れて行く仕事に従事した。部落民に、同様に差別されているキリシタンを苦しめる仕事をさせることで、キリシタンの持つ憎しみや怒りを被差別部落民に向けさせるという、二重の差別の構造を作り出したと考えられる。
- 18) 2002年8月7日付『西日本新聞』。
- 19) 橋爪（2002）は歴史的環境を「かつてあった記憶を想起するために歴史を学習する環境」と定義した。
- 20) この制定過程において、広島・長崎両市に「都市建設」に関する姿勢の違いが生じる。当初、この法案を提唱するに当たり広島市は長崎市に共同で提唱することを持ちかけた。しかし、この提案に長崎市は消極的であった。その理由としては、長崎市の被爆は市街地中心部ではなく北部の浦上地区であったことと、被爆地という特殊性を強調した都市復興になることに対して消極的であったためである。そこには、後述する浦上の被爆者が「受難」という言葉で被爆体験をキリスト教的な聖域として表象したことも影響があると指摘してよい。また同年は「ザ

ヴェィエル渡来400年祭」の開催を控えており、その準備に忙殺され共同提唱は辞退したと言う。その後、広島単独での採決が決定しかけると長崎の当局は共同で制定すべきと「タダ乗り」しようとしたが、広島側に固辞された。この動きを見ると、長崎市当局の中でさえも被爆からの復興が必ずしも最優先事項ではなかったことがわかる。

21) ロッシ (1987)、大島・福田訳 (1991)。

22) 1996年8月9日付『長崎新聞』夕刊「長崎平和祈念式典被爆者ら欠席」。

引用・参考文献

浅井基文『ヒロシマと広島』2011 かもがわ出版

石丸紀興『「広島平和記念都市建設法」の制定過程とその特質』1988 (広島市公文書館紀要第11号) 広島市公文書館

奥田博子『原爆の記憶』2010 慶應義塾大学出版会

川野徳幸『原爆被爆者は何を伝えたいのか—原爆被爆者の体験記・メッセージの計量解析を通して—』2010 長崎医学会雑誌 vol:85 pg:208-213

高瀬毅『浦上天主堂：もう一つの原爆ドーム』2009 平凡社

高橋眞司『新・長崎にあって哲学する』2004 北樹出版

高橋哲哉『国家と犠牲』2005 日本放送出版協会

寺光忠『ヒロシマ平和都市法』1949 中国新聞社

永井隆『長崎の鐘』永井隆全集 2003 サンパウロ

橋爪伸也『集客都市—文化の「仕掛け」が人を呼ぶ』2002 日本経済新聞社

広島市公文書館編『広島平和記念都市建設法の制定の当時を振り返って』1987 広島市公文書館

広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会『広島・長崎の原爆災害』1979 岩波書店

福間良明『複数の「ヒロシマ」記憶の戦後史とメディアの力学』2012 青弓社

舟越耿一『ナガサキから平和学する!』2009 法律文化社

ロッシ、アルド著／ダニエーレ・ヴィターレ編『都市の建築』1987 (大島哲蔵・福田晴虔訳=1991) 大龍堂書店